# 『梨の花』と異安心―中野重治の浄土真宗観―

第64回中野重治を読む会@石川四高記念文化交流館
2023/12/2　由谷 裕哉

## 1　作品の書誌，構成，本発表の意図，先行研究など

1957年1月から58年12月にかけて『新潮』誌に23回掲載され，1959年5月新潮社より刊行。全23パート(論者によっては“章”とするが，テキストにはその記は無し)からなる。以下，本発表での引用は新しい『中野重治全集』第６巻(筑摩書房，1996年)より。

松下裕『評伝中野重治』(筑摩書房，1998)によれば，中野は1950年11月に日本共産党より除名。52年1月(か)に再入党している由(pp.309f.)。1954年1月から7月まで『群像』誌に初の長編『むらぎも』を連載(単行本の刊行も同年8月)。1955年末に，いわゆる六全協問題が起こった。1958年7月，第7回党大会で中央委員に選出(したがって『梨の花』の連載は，中野の人生の中で好調な時期に相当するであろう)。1959年は5月からソ連を旅行しており，『梨の花』刊行は，中野が日本を留守中であったと云う(同書p.400)。

『梨の花』は主人公・高田良平の，小学校１年から福井市の中学１年までを描いている。タイトルは，パート21で良平が中学校受験の為に汽車で福井市に向かう途中の回想で，『日本少年』誌に載っていた油絵の連想から，家に生えていた梨の花を見に行って美しいと思ったことより(全６，p. 332)。

中野が以前に書いた短編が，再利用されるエピソードもある。「谷口タニ」(1936；男女児童の苗字を合わせた嫌がらせ)，「おじさんの話」(1936；虫歯と地蔵堂)，「おばあさんの村」(1941；ヨッチャナギの漢字)，「孫とおばば」(1955；担任の女教員〈恩地先生〉の夫が浮気したので，女教員が逃げてしまい出勤しなくなる；＋正信偈の冒頭の文言引用)，等など。後述のように先行研究が注目するパート９，10の皇太子行啓の件も，かなり異なる描かれ方だが，プロレタリア文芸時代における「鉄の話」(1928)でも(こちらは，行啓の年が史実上のM42の４年後に設定)。

本発表ではパート１と２の記述に沿い，とくにパート２で前面に出される**異安心**に注目する。かつ，発表者が発見した，先行研究で触れられなかった異安心に関する情報の開示を含め，その後のパートも考察に加えて，本作でのその意味づけを考察し，中野重治の浄土真宗観に迫ろうとする。

**{参照した先行研究について**〈他にもある模様〉**；＋作中“異安心”の評価については後述}**

中野の伝記的事実との対照(兄，妹との関係含む)に加え，農村と都会との関係，さらに例によって転向体験が同作に反映しているとする。

満田郁夫「『梨の花』について」, in 満田『中野重治論』新生社, 1968.

中野の郷土への遡源志向，彼の美意識という観点，農村共同体から離脱・自立する過程など。

木村幸雄「『梨の花』の構成」, in 木村『中野重治　作家と作品』桜楓社, 1979.

村落共同体の信仰(異安心が少しだけ言及)と性，階級制度が描かれるとしつつ，良平が中学校になってもムラに帰ってくることに注目する。短文だが，先の2論考より有益かも。

円谷真護「生の根の村，そして脱出」, in 円谷『中野重治　ある昭和の軌跡』社会評論社, 1990.

９から10で皇太子(嘉仁親王)の行啓，18で明治天皇の死が描かれることから，中野の「天皇制」観を表象する作と解釈する先行研究が複数あるが，あまりにも硬直した教条主義的な見方では？；→《後述のように，パート18で主人公の祖父が明治天皇への感謝を述べることをどう説明する?》

木村幸雄「中野重治と天皇制―視点と構造―」,『福島大学教育学部論集』50, 1991；←《後述するパート18に出る「御文章」の比定さえ誤っており，仏教・真宗に対するリスペクト無さ過ぎ》

島崎市誠「中野重治のこだわり―『梨の花』論の前提―』, in 島崎『論集　中野重治』龍書房, 2008.

本作が“読みにくい”背景に，時間の入れ子構造や逆行があるとして，いつくかの例を検討。しか

し，こうしたことは既に『むらぎも』にもあったのでは？　パート1の分析↓は参考になるが。

工藤篤子「中野重治『梨の花』の時間」,『弘前大学国語国文学』29, 2008.

むしろ，“研究”ではないが，次がよほど作品世界に接近しているのでは。

堀田善衛「良平と重治―『梨の花』中野重治」,『新潮』1959－9;⇒『堀田善衛全集』13.

“幼年時代に，こどもの私と相手のこどもがなにかをしてあそんでいる。いくつかあそびをちがえて，次々とそれをやる。そろそろそのタネがつきてしまった。(中略)そこで必ず，「さべろか…」と言う。”

“皇太子が来る，伊藤博文が殺された，日韓合併になった，しかしそれら日本の，いわば上部での出来事は，どうしても良平の「さべり」の世界の中心部にまでは乗り込むことが出来ない。”;(全集，pp.272f.)

## 2　パート１について

良平が徳利をさげて高瀬屋を出てから帰宅するまで，良平が見た店や景色と，そこから良平が連想した事象が語られる；《上述した工藤篤子2008論文によれば，ノンブル↓の13のシーンからなるとされる》

①高瀬屋の店を出る，②松岡屋(松岡という村の出)，③こんにゃく屋と年寄りのおんさん(年寄りおばさんが「じよろしゆあがり」であること)，村から若い衆が大阪に出て行くこと(全6，pp.4f.)，④お菓子屋の田中屋(田中は苗字だろう，良平は飴湯が好きであること)，⑤「じよつさま」というお寺(このお寺の「おしんぶつつあん」と「ごぜん」のこと; 本町の浄応寺か;p.6)，⑥「どじようをとる家」，川，⑦「じよつさま」の背中の板塀に貼ってある看板のうち，人の顔の絵のある三つ(仁丹，大学目薬，ダンロップタイヤ)，⑧岸の草のところで，鮒を釣っているおんさん(煙管を咥える，何かの病気)，⑨女の同級生が2人いる西里へ(1人が「めえろのこ」であること，4，5人の上級生が良平の通せんぼをすることがあるが，今日はされず; p.10)，⑩西里のはずれの「よのき」(良平は欅と榎の区別が分からない，云々)，良平の奥歯が痛んでくる，⑪大根畑のところで，大根を噛むと歯が痛む連想，良平は冬に虫歯に泣かされたこと，虫歯の地蔵様に一文銭を置いて拝んだこと，など; pp.11f.)，⑫蕪(かぶら)の畑(おじさん<祖父>の代わりに宮平の家に呼ばれた時の回想，坂手のおんさんがおじょつさまに縄手の蕪が下肥をかけているので柔らかいという話をしたこと，など)，歯がまた気になる，⑬帰宅(p.16).

帰宅すると，おばば(祖母)から「よつちやなぎ」のおんさんが休みで朝鮮から来たと告げられる(p.17)。「ちやなぎ」の字が分からないこと。虫歯に難儀したと良平がいうと，おんさんが「やいと」(お灸)をすえれば止まると言われる。おばばは歯が一本も無い。おばばはランプを持ってくる(pp. 18ff.)。

## 3　パート２について

翌日，良平が四つ柳の写真屋のおんさんと一緒におじさん(祖父)の朝のおつとめに同席するまで，家の中の詳細や，おばばが台所で「おぶつけさま」を詰めていることなど(pp. 20ff.)。仏壇の奥に阿弥陀さまと御開山さまの軸，六字名号が書いてあるものが架かっていることなど(p. 23)。

おじさんが正信偈を称え始める。

「きい，みよう，むう，りよう，じゆう，にように，らあい....なあ，むう，ふう，かあ，しい，ぎい，こう....ほう，ぞう，ぼお，さあ，いい，にん，じい....」(p.24;次の引用も同頁)

↳**《正信偈，冒頭》**；帰命無量寿如来，南無不可思議光，法蔵菩薩因位時

「ぜんどう，どくみよう，ぶつ，しよう，いいい...」(この辺から節が変わり，良平は称えられず)

↳**《同上，中ほど》**；善導独明仏正意

「ごわさん」がすみ，御文章となる。「御文章は，おじさんは読まぬ日もある。どんな日に読み，どんな日に読まぬかは良平にはわからない。だれだれの日，先祖の命日という日にはかならず読む」(pp.

24f.）とされ，お寺さまが来た時は，「おじよつさま」（住職），「ごぜん」だけ一人で読む，とされる。以下，引用中の下線は，『御文章』と比べて特殊な読み方の場合。

「そもそも，とうこく，せつしゆうひがしなりのこおり，いくたまのしようない，おおざかというざいしようは」(p.25)，「おうこよりいかなるやくそくのありけるにや，さんぬるめえおうだい五のあきげじゆんのころより，かりそめながらこのざいしようをみそめしより」，「すでにかたのごとく，いちうのぼうしやをこんりゆうせしめ，とうねんははやすでに三ねんのせいそうをへたりき，これすなわち，おうじやくのしゆうえん，あさからざるいんねんなりとおぼへはんべりぬ，それについて，このざいしようにきよじゆうせしむるこんげんは，あながち一しようがいをこころやすくすごし，えいぐあえいようをこのみ，また，くわちようふうげつにもこころをよせず，あわれむじようぼだいのためには，しんじんけつじようのぎようじやもはんじようせしめ，ねんぶつをもうさんともがらも，しゅつたいせしむるようにもあれかしと，おもう一ねんのこころざしをはこぶばかりなりイ，またいささかも，せけんのひとなんどもへんじゆうのやからもあり，むつかしきだいもくなんどもしゅつたいあらんときは，すみやかにこのざいしようにおいて…」(p. 26)

↳《**御文章，四帖の十五　大坂建立**》；抑，当国摂州・東成郡・生玉の庄内・大坂といふ在所は，往古よりいかなる約束のありけるにや。去んぬる明応第五*の秋下旬の頃より，仮初めながらこの在所を見初めしより，既にかたの如く一宇の坊舎を建立せしめ，当年ははや既に三年の星霜をへたりき。これ即ち往昔の宿縁浅さからざる因縁なりと覚えはんべりぬ。《＊明応5年は1496年》

それについて，この在所に居住せしむる根元は，あながちに一生涯を心安く過し，栄華・栄耀をこのみ，また花鳥・風月にも心を寄せず，あはれ無上菩提の為には，信心決定の行者も繁昌せしめ，念仏をも申さん輩も出来せしむるやうにもあれかしと思ふ一念の志を運ぶばかりなり。又些も世間の人なんども偏執の族もあり，むつかしき題目なんども出来あらんときは，速かにこの在所に於て（執心のこころを止めて，退出すべきものなり。）；《←御文章の表記はテキストにより異なる，これは『真宗聖典』〈法藏館，1935〉による》

以下，「良平のところで」おばばが「仏様のこと」を云う文言として，次の４者が引用(p. 26)。

「**だい十八のぐわん….**」(『大無量寿経』に説かれる四十八願のうち，十八願「設我得仏(たとひ我れ仏を得んに)　十方(の)衆生　至心(に)信楽(して)　欲生我国(我が国に生ぜんと欲ひて)　乃至十念（せん。）若不生者(もし生れずば)　不取正覚(正覚を取らじ。)　唯除五逆　誹謗正法(ただ五逆と正法を誹謗せんことを除かん。)」のことか ）;《←後述，異安心とされる十劫秘事〈十劫安心〉を非難する文言だが…》

「**そもそもとうりゆうあんじんのおもむきは…**」（『御文章』三帖の八「不廻向」より，「抑，此の頃，当国他国のあひだにおいて，当流安心のおもむき….」のことか;《←十劫邪義を批判する文言》

「**一文ふちのあまにゆうどうも…**」（『御文章』五帖の二「八万法蔵」より，「八万の法蔵を知るといふとも，後世をしらざる人を愚者とす。たとひ一文不知の尼入道なりといふとも」のことか）

「**ぶつとんほうしやのねんぶつ，もうすべきものなアリイ，あなかしこう….**」(『御文章』五帖の四「抑男子女人」より，「これを即ち仏恩報謝の念仏と申すなり」のことか，『御文章』に他にも類似文言有り；⇒三帖の五，六，四条の九，五帖の十二，十五など）

続いて，『御文章』四帖の十五，上記引用の次の箇所を「おじさん」が称える描写に戻る。

「それについて，ぐろうすでにとうねんは八十四さいまでぞんめいせしむるじよう，ふしぎなり，まことにとうりゆうほうぎにもあいかなうかのあいだ，ほんもうのいたり，これにすぐべからざるものか，しかればぐろうとうねんのなつころより，いれいせしめていまにおいてほんぷくのすがたこれなし…」，（p. 27；この辺からおじさんが危うくなる，とされる）

↳《**上記，四帖の十五 続き**》；それについて愚老すでに当年は八十四歳まで存命せしむる條不思議

なり。まことに当流法義にもあひかなふ歟のあひだ，本望の至これに過ぐべからざるもの歟。

然れば愚老，当年の夏頃より違例せしめて，今に於て本復のすがたこれなし。

「ついには，とうねんかんちゆうには，かならずおうじょうのほんくわいをとぐべきじよう，いちじようとおもいはんべり，あわれあわれぞんめいのうちに，みなみなしんじんけつじようあれかしと，ちようせきおもいはんべり，まことにしゆうぜんまかせとはいいながら，じゆつくわいのこころもしばらくやむことなし…」(同上頁)

↳ **《同上》** ；終には当年寒中には，必ず往生の本懐を遂ぐべき條，一定と思ひはんべり。あはれく，存命の中にみなみな信心決定あれかしと，朝夕思ひはんべり。まことに宿善まかせとはいひながら，述懐のこゝろ暫くも止むことなし。(又はこの在所に三年の居住を経る，その甲斐とも思ふべし。)

「われひと一どうに，おうじようごくらくのほんいを，とげたもうべき，も，の，なアリイイ，あなかしこおウ，あなかしこおウ。」(pp. 27f.)

↳ **《同上》** ；(相構へて相かまへて，この一七箇日報恩講のうちに於て，信心決定ありて，)我人一同に往生極楽の本意を遂げたまふべきものなり。あなかしこく。

続いてあさい(朝飯)となる。四つ柳のおんさんが泊まったから，鮒が入っている(p. 28)。おばばに歯が無いため，料理に制約があることなど。

四つ柳が「『いあんじん』(異安心)のほうは，やつぱりやかましいようですか。」と問うと，おじさんは「**異安心，異安心と....ばかどもが.....**」と応える(p. 29)。

その後，良平が“異安心”について考えをめぐらす。「おじさんが，お手継ぎのお寺から，何か迫害されるようなことになるんだろうか」(p. 30)。「いあんじん」という言葉は，大人が「こそこそ声のように」言うのを聞いて，良平は知るようになった。時々うすっぺらな異安心関係の本が送られて来る。その本の後ろのほうに，川に葦が生えていて，白鷺が一羽，一本足で立っている絵があったことを良平は覚えている(p. 31)。

お手継ぎの寺「**こおしよつ様**」に対して，別のお寺は「**木田のお寺**」と言う。「こおしよつ」様は同行の葬式の他，秋に御膳米を求めて来る。また説教にも来るが，「木田のお寺」の「おじよつさま」も説教に来ることがあり，おじさんはその在所に草鞋を履いて聞きに行く(pp. 31f.)。

異安心については，良平の家と親類でも一家でもない「**桑原のおじ**」が関係している。「それやア，れんによ様もれんによ様じやが，なんというても，ほうねん様がのお...」，「うちらは，それや，どこまでも念仏の行者じやから...」などとおじさんは言っていた(p. 32)。

良平は，「『異安心』で行つて，死んだとき『こおしよつ様』が葬式をしてくんなるじやろか...」と心配になる。また，二つのお寺で銭が余計にかかるのでは，とも(p. 33)。

続いて，待ち合わせの「お寺*の御拝」に誰もいないこと，村一番の大地主✶の三男である和子さんのこと(良平と違う小学校に通っていること，辰さんという若い男が付き添うことなど)，和子さんも遅れており，３人で学校に向かう(pp. 33ff.)；《*一本田の本派善教寺か//✶「鉄の話」の設定と大違い》

## ４　パート２に出る“異安心”の寺モデル

良平の祖父が『御文章』の「大坂建立」で泣く，というのは中野の幼年時代の体験に基づくらしい(中野「控え帳」一〈初出1935〉，全集10，p. 70)。その祖父が「異安心」を深く信仰していた，というのも，(後述のように)事実だったらしい。ということで，『梨の花』パート２の語り口で**異安心**は重要な点と思われる。この後のパートでこの問題がどう捉えられていたか(なお，下記パート以外にも真宗・仏事が触れられるが，以下は発表者がとくに注目すべきと考えるもの)。

パート14で「おばば」が亡くなり（全6，p. 197），「桑原の異安心のおじ」が家に来て，「怒つたような顔をして」(p. 198)奥へ入っていく。その後，朝鮮から父母と二人の妹が戻ってきて，「お手つぎの寺の御前が，番僧と寺男とを連れて」(p. 199)やって来る。「あみだ経」や「かん経」が読誦される。葬式が終わって，「中村の家」(p. 203)に父とよばれる話へと続くが，この間，“異安心”の話は無い。つまり，祖母の葬儀に“異安心”(木田のお寺）は関わらなかった，ということ。

パート17で，「おじさん」が「木田のごぜん」の葬式に「桑原のおじ」と共に出かけている時，良平の頭に出て来たことの一つとして，「桑原のおじ」の話で木田のお寺さまが「インフルエンザ」(p. 251)で死んだこと。「木田の御前」が風邪で寝ていた時，御聴聞の催促が来て，周りが止めるのに出かけたことで病気が悪くなって死んだという。良平の家で御聴聞宿をした時，御前は木皿から椎茸の形の菓子を良平に差し出した。御前は小柄で痩せていたが，色白で「きれいな年寄りだつた」(p. 252)。

（別エピソードの後）良平は，押川春浪『海底軍艦』の続きを読みたいと思いつつ，綴り込んである**『問対寸抄』**に，青い紙が挿んである所を読む。この間，同誌の「賛成会員姓名」におじさんの名があってびっくりした。「尋常学校」の字が書いてある所を読むと耶蘇教の話が書いてあり，わが皇国も耶蘇教に入るべきという人がいるが，それが間違いである云々，といった内容であった(p. 269)。

パート18で天皇崩御の後「おじさん」が，「あまり聞いたことのない「御文章」」を称えており，良平は「やっぱしおじさんは『異安心』なんじやろうな...」と思った(pp. 284f.)。

「それ，おもんみれば，人間はただデンコウチョウロの，ゆめまぼろしのあいだのたのしみぞかし。たといまた，エイグワエイヨウにふけりて，思うさまのことなりというとも，それはただ五十年ないし百年のうちのことなり」，「もしただ今も，無常のかぜ来りてさそいなば，いかなる病苦にあいてかむなしくなりなんや。まことに死せんときは，かねてたのみおきつる妻子も財宝も，我が身にはひとつも相そうことあるべからず。されば死出の山路のすえ，さんずの大河をばただひとりこそ行きなんずれ。これによりてただ深くねがうべきは後生なり」，「またたのむべきは弥陀如来なり。信心けつじようして，まいるべきはアンニヨウの浄土なりと思うべきなり....」

↳ **《一帖の十一「電光朝露」の前半》**；夫れおもんみれば，人間はたゞ電光朝露の夢幻のあひだの楽ぞかし。たとひまた栄華栄耀にふけりて，思ふさまの事なりといふとも，其はただ五十年乃至百年のうちの事なり。もし只今も無常の風きたりて誘ひなば，いかなる病苦にあひてか空しくなりなんや。まことに死せんときは，豫てたのみおきつる妻子も財宝も，わが身には一も相添ふことあるべからず。されば死出の山路のすゑ，三塗の大河をば，唯一人こそ行きなんずれ。これによりて，ただ深く願ふべきは後生なり，またたのむべきは弥陀如来なり。信心決定して参るべきは安養の浄土なりと思ふべきなり。

この御文章を聞き，良平は皇后陛下や皇太子殿下は天皇陛下の「妻子」とは違うだろう。また天皇陛下は「エイグワエイヨウ」をしていないだろうし，死んでから「アンニヨウの浄土」ではなく，アマテラスオオミカミの方に行くのでは，などと思う(p. 285；小学生の感想としては，かなり不自然だが)。良平がこのように思っていると，「おじさん」は次のように云う(同上頁↓)。

「御恩にはなってるさかいの。何というたつて，ゴイツシンまでとはすつぱり変わつたがい....」

{先行研究における“異安心”解釈}

関章人「中野重治と浄土真宗」，『青磁』11，1994.

「木田のお寺」を，福井市木田の**長慶寺**(本派)とする。同寺は，文化年間の三業惑乱の際の「長慶寺事件」と関わったが，三号帰命説についた寺院ではなかった。福井近辺で**三業帰命説***側の寺院が多く，逆に本山から正当とされた長慶寺が異端とされた(←にわかに信じがたいロジック)；《*意(心)・口・身の三業

を通して阿弥陀如来に帰命するという，自力救済的な傾きの“三**業帰命説**”を唱えた18世紀後半頃の**功存**による説が，19世紀の文化年間に至って寺社奉行により異安心と裁定された。功存は越前の本派僧だったが，文化年間に福井周辺の本派寺院の多くが三業帰命説をとっていたという関論考は本当か？☆；＋中野家の手次寺だった本派興宗寺✶がこの頃までに三業帰命説の影響下にあったとすれば，本来の手次寺「こおしよつ様」が異安心ということになってしまうので，元々のロジックがおかしい》

{☆『福井県史通史編』３〈1994〉に暴徒が長慶寺に乱入した件を含む三業惑乱の概要が記されているが，現在の福井市内のどの寺が三郷帰命説の中心であったか，等の記載は無い；//✶但馬興宗寺行如は本来は高田派であったが，14世紀覚如の越前下向により大町専修寺如道や和田本覚寺信性と共に本願寺に帰参したとされる;←小泉義博『越前一向衆の研究』法藏館，1999}

また，この頃の長慶寺の住職は甘蔗普薫(あまつらふくん)(1910没)であったが，教義上は異安心ではなかった。

しかし，中野が異安心に執拗に拘るのは，彼が傾倒した暁烏敏らを念頭に置いている，とこれも信じがたいロジック;《←暁烏は大谷派で，かつ彼が一時期異安心とされたのは明治末頃のこと;←これも仏教・真宗に対するリスペクト無さ過ぎな議論》

ともあれ，パート17後半で良平が綴られたものを読んでいた設定の『問対寸抄』は，甘蔗普薫が編纂して長慶寺が出していた。したがって，論旨に疑問の点が甚だ多い関論考*で提唱された長慶寺説が，“異安心”の寺モデルであることは間違いない。同寺の現住所は福井市西木田２丁目；《cf. 福井市みのり２丁目の三門徒派専照寺を「木田のお寺」とする説もある〈当地が昔の木田村に含まれていたから〉。しかし，蓮如を始祖の一人としない三門徒派〈専照寺の「七高祖像」は善導,源空(法然),親鸞,真仏(高田専修寺の初代〉,専海,円善,如道✶(大町専修寺初代)〉が御文章を拝読することは有り得ないので，論外✢》

*①三業惑乱時代の福井で，長慶寺以外の本派寺院(当然，中野家の手継ぎ興宗寺を含む)の多くが三業帰命説を支持していた;←《いわゆる長慶寺事件は,『福井県史通史編』3による限り，三業帰命説を信奉する暴徒が長慶寺に乱入したということ以外は解明されておらず，福井のほとんどの本派寺院が三業帰命説側であったことは，全く意味しない;長慶寺はそうではなかったらしいが…》

②甘蔗普薫は異安心でなかった;←《後述するように，本山から異安心とされていた》

③中野が大谷派暁烏敏に私淑し，暁烏が異安心とされたことが反映;←《1950s初頭，暁烏は大谷派宗務総長であり，中野が本作を執筆時にかつて暁烏が異安心とされたこと〈1910s初頭〉を強く意識したか?;→異安心とされた僧も本山は後に宗務総長に任じた訳で，その人物を念頭に異安心に触れたとは?》

✶(以下に依る)小泉義博「鯖屋誠照寺・中野専照寺の成立」下,『若越郷土研究』41－5，2019.

✢なお，“桑原のおじ”が「れんによ様もれんによ様じやが，なんというても，ほうねん様がのお…」(p.32)と言う箇所は，三門徒派(とくに如道の子・如浄，孫・良全)が浄土宗に傾倒していたことを連想させる。中野はこのことを知っていて，何らかのミスリードを誘ったのか？ ;←三門徒とは，横越證誠寺(よこごししょうじょうじ)(鯖江市)，鯖江誠照寺(じょうしょうじ)，中野専照寺(福井市)を指す;《なお，三門徒派と三業帰命説とは無関係;refer⇒本資料p.11》

## ５ 『梨の花』第２パートを中心に“異安心”が強調されることの考えられる背景

それでは，三業帰命説とおそらく関係無かった(関論考では充分に論証されていないが...)長慶寺を，中野はなぜ「**異安心**」のお寺として強調して描いたのか。以下，憶測を含みつつ考えられる背景を探ってゆきたい。

{『問対寸抄』について}

パート２に出て来る，「異安心関係の」，「うすつぺらな本」のしまいのところに，「川に葦が生えていて，そこに白鷺が一羽，片あし上げて一本足で立つている絵」(p. 31)は，当該誌ＢＮで未確認。あ

るいはこの「うすつぺらな本」は，パート17に出て来る『問対寸抄』(p.268)とは別のものなのか。

《cf.『問対寸抄』より大分後の刊行になるが，同じく長慶寺が出していた『截舌雀余暇』全10巻(M39〈1906〉.1－M40.1)には，第5号の末尾に花〈朝顔?〉のイラストが付記されているので，長慶寺刊の『問対寸抄』以外の小冊子のどこかに，その絵があったのか》

とはいえ，同頁から「こないだひよいとみたらおじさんの名が書いてあつた」云々と，「**賛成会員姓名左ノ如シ**」として，４名転記の後で「二本田のところにおじさんの名が書いてあつた」(pp.268f.)というのは，同誌９号(M23〈1890〉.11)のp.20の『賛成会員姓名』欄に掲載されている，「**高椋　中野治平**」のことだと思われる。「おじさんの名」の前に書かれている４名(高屋の佐竹忠兵衛，岡保の田山省三，小黒の辻川長左衛門，篠岡の北川治右衛門)も，居所・姓名ともほぼ改変なく同上頁に載る(佐竹某は高屋でなく飯塚で，転記ミスであろう)；⇒その後，同誌第17号(M24〈1891〉.7)のp.21，『本会永続資本寄付人(七月分)』には，「**高椋　中野治兵衛**」とある。

また，その次に出て来る耶蘇教の話は，同誌第７号(M23〈1890〉.9)掲載記事を指すであろう。

「尋常学校の学童もよく知るところにして...」(p.269)は，同誌同号p.18にある，「尋常学校の。学童もよく知所にして。」であろう。「問」の箇所に書いてある文言の引用で，「耶蘇の話については，今は世界を地球といひて丸きものなりとし，何ごとにも，文明とか発明とかと，一も二も西洋にならひ行く世とはなりしなり。其西洋は，すべて耶蘇教国なれば，此文明にともなはれて，はてはてはわが皇国も，智識ある人から耶蘇教に入るならんと憂へらるることなり。これはいかが。」(p.269)は，ほぼ同文で“水野真”という人の問いとして，同誌同号p.12↓にある。

耶蘇の。はなし就(つき)ては。今は世界を。地球といひて。円きものなりとし。何ごとにも。文明とか発明とかと。一も二も。西洋にならひ行く。代とはなりしなり。其西洋は。都て耶蘇教国なれば。此文明にともなはれて。はて〈は，わが皇国も，智識のある人から。耶蘇教に入るならんと。憂らるゝとなり。これはいかゞ。

ここまでは表記の違いを除いてほぼ同文だが，『梨の花』の回答，「それは甚しきあやまりなり，文明と耶蘇とは，水火も啻(ただ)ならぬまで相容れざるものなり，理学，哲学等がさかんになるほど，耶蘇教は衰ふものなり。文明に耶蘇教が与(あずか)りて力ありといふは，西洋の歴史を知らぬ人の多き日本ゆゑ，それをたよりに彼(かの)宣教師などが，こころ拙(つた)なくもつねに誑(たぶか)りをほしひままにすれど，それは掩(おお)ふべからざることなり。」(p.269)は，若干の割愛・変更箇所がある；⇒「相容ざるものなり。」の後に，「世が文明にすゝみ。」が入る＋「つねに誑(たぶか)りをほしひままに」は，「つねに誑惑(いつわり)を。恣(ほしひまゝ)にすれど。」

その後に，「片仮名が見えるのでそれを拾つてみる」として引用される，「羅馬(ローマ)法王インノーセント第四世が」，「西班牙(イスパニヤ)の女王イザベルラの謂ふところを」，「サラマンカに貯蔵したる東洋文学の書冊を焼くこと六千冊」，「コロンブス氏が新世界を発見するを以て」，「コペルニュキス氏はじめて地動の理を論立し」は，ほぼ同文で同誌同号pp.13ff.に傍線が引かれている文言(ただし，「コロンビス氏」)。

なお，良平はこれらのうち「コロンブスひとつしか名を知つていない」ので，やはり『海底軍艦』がいいとそちらを読むことにした，とパート17が閉じられる。

『問対寸抄』は，第１号が明治23年(1890)3月刊で，明治30年(1897)1月刊の第50号まで出された(その後，続編が少なくとも7号〈M32・1899年3月〉まである)。各号に数点の「問対」があるので，全50冊で問いが200前後あるのではないかと思われる。その中で，中野がとくにこの耶蘇教の件一点をとりあげたのは，上記“水野真”による問いに対する甘蔗普薫の回答に感銘を受けたからではないだろうか。とくに真宗信仰の奥義に読者を導くのではなく，軽薄な西欧崇拝を戒めている所に特徴があるのでは。『海底軍艦』と対比させた意味は，良く分からないが(この点は，本配布資料末尾で再考する)。

因みに，神仏判然の制度(第６号)，仏性の問題(第４，６，７，32号)，心識の問題(第９号)，霊魂の問題，霊魂と因果との関わりなど(第11号)，弥勒菩薩と兜率天(第22号)，機法一体(第33号，西山義を参照し，典型的な異安心とされる**十劫秘事**も参照<←肯定している訳ではない?>)，神仏の告げ(第40号)，和光同塵(第41，42号；日蓮が参照される)，等など，真宗に限定されない仏教一般，あるいは民俗信仰に近い宗教観に対する問いにも答えている。もう少し厳密な分析が必要であろうが，真宗教義からかなり逸脱している回答も含まれるように思われる。とくに，唯識，西山義・十劫秘事や日蓮を参照する点，霊魂や神祇の捉え方など。神祇に関しては，覚如から義絶された**存覚**の著作『六要鈔』『諸神本懐集』を援用して答えている(第６号)。

西本願寺側が，彼の書いたテキストで国会図書館に唯一所蔵されている**『末代のひかり』**(櫻楓会，1906)や，『問対寸鈔』，『截舌雀余暇』などにおける一連の言説を異安心と断罪した具体的な資料を，発表者はまだ確認できていない*(上記のように『問対寸抄』には，異安心と思われる言説が含まれるが)。

*次のような文献を調べたが，西本願寺側の彼への言及は見つからなかった。

大原性実『秘事法門の研究』顕真学苑出版部，1933.

大原性実『真宗異義異安心の研究』永田文昌堂，1956.；←《「現代の異義異安心」として，福井県に関して複数列挙されているが，福井市内の例はあげられていない》

とはいえ，足立尚計**『知られざる福井の先人たち』**(フェニックス出版，1992年)p. 192の「**甘蔗普薫**」項目に，彼が本山から異安心とされた旨，明記されているので，先に参照した関章人論考で甘蔗普薫を「けっして宗義上で異安心といわれる坊さんではなかったようである」(『青磁』11，p. 22)と推定しているのは，完全な誤りということになる。

ともあれ，中野が上記の耶蘇教に関わる問答に大いに共鳴したことは，間違いないであろう。

対して，中野が浄土真宗関連で批判的に捉えている事象を，先にも参照した中野の**「控え帳」**一(全集10) から見ておきたい。彼の転向出獄(1934年5月)から数ヶ月後の同年10月の記銘(発表は1935年1月とのこと)。『梨の花』で**異安心**が語られるのと近い内容(大坂建立の御文など)が後者に含まれるので。

冒頭，借りて読んだ本の話のうち，西田天香『懺悔の生活』と大谷光瑞『食』が言及される。前者では求道者的な人物が面会料を支払って本願寺法主に会い「後生の一大事」を問うたが，相手にされなかったこと，後者は大谷光瑞が美食家であったことが語られる。両者とも(前者は東西どちらの本願寺か不明だが)，中野が本願寺法主を非難しようとする姿勢で書かれているのではないか。

続いて，中野が中学時代に「手つぎの寺に下宿していた」回想で，大谷光瑞本に対するのと似たニュアンスの文言がある。「私たちは女中や寺男といつしょに沢庵の煮たのを菜にしていた」のに対し，「寺の家族のためには毎日魚屋などが非常に威勢のいいかけ声で通つてきていた」。英語の教師が「お寺の和尚さんにあげてもいいような見事な七面鳥の御馳走」という表現について，「日本の坊主は簡素な暮しをしているが，イギリスの和尚さんは村いちばん美食している」と説明したことがおかしかった，と中野は皮肉っている(p. 70)；《←「こおしよつ様」の食事に上と下があることは，『梨の花』パート21でもp. 333に出ている》

さらに中野は，村々への「寺自身の課税」(同頁)を書き上げている。穀物の収穫時の「お初穂」が「**御膳米**」として。他にお寺の子どもの学校費，跡継ぎの嫁取り費，また嫁入り費，袈裟や緋の衣代，等など。中野は「**一般に寺の家族たちは，ある種のヨーロッパ人が日本人を見ているような眼で大多数の同行衆を見下していた**」と断言する(pp. 70f.)；《←「こおしよつ様」の「御膳米」を寺男が袋を持ってきて集める件は，『梨の花』パート2，p.31にも出る；＋「善作の頭」<1932>にも》

↑以上のうち，とくに最後の引用は極めて直接的だが，中野が西本願寺および手継ぎ寺の興宗寺をこの時点で悪しきものと見ていたことの表れであろう。この文章は書かれた時期が『梨の花』の20年以上前であり，また『梨の花』は彼の人生の中で比較的良い時期に執筆されたと思われるのに対し，こちらは転向出獄後しばらくして書かれたということで同列には論じられないが，中野の浄土真宗観の一端を表象していると捉えておく；←p. 70の上記引用の前に，蓮如，御文章，吉崎などが参照されるが，それは否定的なニュアンスではない。つまり，浄土真宗の信仰面ではなく，組織面に中野は憤っていた，ということかもしれない。『梨の花』パート２で「おじさん」の称える**正信偈**，**御文章**についても，否定的な含意は全く無かった(異安心の信仰面に関心が無かったかは，後に再考する)。

対して『梨の花』パート17では，“異安心”とされる「木田の御前」が亡くなったと知らされた際の回想(良平の家で聴聞宿をした時の)で，御前のことを「きれいな年寄り」と云い，菓子を譲られたことに関連して「木田の御前は，ほんとにえらい人じやな...」と思う，とある(p. 252)。西本願寺の法主や興宗寺(の一族) を非難する上記の描写に対して，百八十度反対の肯定的な評価であろう。これは，先に引用した『問対寸抄』第７号における耶蘇教に関する問答の評価とも対応するように思われる。

{比較}；中野のプロレタリア文芸時代の短編「**砂糖の話**」(1930)に，“**異安心**”の語が２回登場する。全体として概要するのが難しい作*だが，「善隣養老院」が舞台で，そこでは朝，昼，晩の食事に「いつさい砂糖を使いませぬでした」(全集1, p. 326)という，奇妙な設定。

＊ ここで検討はしないが，代表的な先行研究に以下があり，「鉄の話」と比較。“異安心”への言及は無し。
佐藤健一「中野重治「砂糖の話」の評価をめぐって」，『国語と国文学』57―1, 1980.
なお，中野のプロレタリア文芸時代に触れた代表的な研究書と思われる，杉野要吉『中野重治の研究 戦前・戦中篇』(笠間書房, 1979)，および湯地朝雄『プロレタリア文学運動』(晩聲社, 1991)では，何故か同作が検討されない。

最初の“異安心”は，ある夏の日曜日に本山から来た御使僧が「**異安心**」について話した，という件(p. 328)。二つ目は，この御使僧の話の後，「横川じいさん」が「もらい」で砂糖の塊を取得し，夜同室の２人となめた後で屋根裏に隠そうと相談した。その後，「沖じいさん」が今朝の御使僧の法話を思い出し，「これが**異安心**というものでなかろうか。」と思い，「そんなことはない。」と自ら否定する場面(p. 331；1930作だというのに，なぜ現代仮名遣いなのかは不明；←新版全集の方針？)。

上記のように，養老院で３度の食事に砂糖が全く含まれないという設定が当時の事実関係と対応していたかどうかの疑問に加え，さとうきびの栽培と植民地との関わりが長めに述べられる(pp. 327f.)など，作品として読解が難しいように思われる(↳ それで先行研究が稀少なのかも)。

とはいえ，この養老院は本山経営で，本山は京都にあると明記されているので(p. 324)，おそらく東西どちらかの本願寺(p. 324に，登場人物たちが仏壇の前で浄土和讃をあげる場面がある)。したがって，この「砂糖の話」でも本山本願寺は悪しき存在であり，**異安心**はその悪しきものに抵抗する動き(上記のように，それを表した人物自身による否定を含むが)を表しているのではないだろうか。

↳ 好感の持てる異安心，「木田の御前」　対　悪しき手継ぎ寺「こおしよつ様」(＋本山／法主)
という図式か。

とはいえ，そうした組織論的理解で全てを説明できるとも思えない。

パート2の“桑原のおじ”の「ほうねん様がのお...」〈p. 32〉は浄土宗寄りの秘事(如道の子や孫?)を連想させ，パート18で祖父が天皇崩御に際して読んだ“電光朝露の御文”に関連して，この御文を読む祖父を異安心と見なす描写(pp. 284f.)などに，**中野の異安心/浄土真宗観**が表出しているのかも。

＋p. 26でおばばが「仏様のこと」を云う4つの文言のうち，最初の二つ(大無量寿経の十八願，御文章三帖の八)は異安心を非難する趣旨であり，何故このような設定にしたのか？；《←cf; p.31に,「おじさんのほうがいつそう異安心で，おばばのほうはそれほどでもないらしい。しかしおばばも，どちらかといえばやはりそのほうらしい」，とあるのに》

{その他の疑問}

1) パート２とパート17などとの“異安心”評価の違いはどう解釈すれば良いのか。主人公良平の成長(小１から小４位）による，という意味だけか。

パート２；「異安心で行って，死んだとき『こおしよつ様』が葬式をしてくんなるじやろか....」

「木田のお寺」へも「ぜん」(銭)はあげんならん。そうすると，「こおしよつ様」と両方で銭がよけいかかるじやろう。....(p.33)

パート17；(木田の御前について)年はいくつか知らぬがおじさんよりもまだまだ年寄りだろう。年寄りにはきたない年寄りときれいな年寄りとがあるが，木田の御坊さまはきれいな年寄りだつた。(pp.252)

「木田の御前は，ほんとにえらい人じやな....」と良平は思う。(中略)山の沖というのはどこの村だか知らないが，汽車から降りて，輿に乗りかえて，小柄なひどく年取ったお寺様が，吹雪のなかをかかれて行く様子が活動写真のように見えてくる。(同上)

なお，パート23(最終)で良平が福井の中学校の下宿(興宗寺)に戻ろうとする時に，「おつかさん」が次のように声をかける(p. 367)；

「かたきの家へ行つてもお茶だけは飲むもんじやがいの。旅立ちにや，飲んで行くもんじやざ....」

2) パート17末尾で，良平が『問対寸抄』を読むのを止めて押川春浪の『海底軍艦』(1900)を読むことにするのは，意味があるのか。

しかし実は，はやく『海底軍艦』の続きが読みたくて仕方がない。八丁つぶての喜平次はどうなるか。暗い海の上を，そこだけ白波を立てて走つている軍艦がそのまま水面から沈んで行く。白波が消える。しかしそうやつて，水のなかを，軍艦がもぐつて行くのだ。しかしそれは，いちばんしまいに読む(p.268)。

発表者の手元にある桃源社1970版『海底軍艦』に，このシーンは無い。青空文庫版『海底軍艦』で，“八丁つぶて”，“喜平次”で検索しても，“一致なし”と出る。因みに，“**八丁つぶての喜平次**”は馬琴の『椿説弓張月』に出るキャラクター。

↳『海底軍艦』の続編とされる『武侠の日本』(1902)他にあるシーンなのか，中野がうろ覚えで別作品のキャラクターを書いてしまったのか(中野がこのパートを執筆時に，少なくとも『問対寸抄』第７号と第９号は手元にあったが，『海底軍艦』は無かった，ということ?)，意図的に間違えていわば創作したのか，現在までのところ子細不明；⇒ここで唐突に『海底軍艦』に触れたことで考えられることを，2点。

〈1〉押川(1876－1914)は，田端で後の中野邸の近くに住んでいたらしいので(住んでいた時期は全く重ならないが)，ご近所さんという親しみがあったか？

〈2〉『海底軍艦』最後のクライマックス(インドの海賊船7隻に，軍艦“日の出”と海底軍艦が勝利)の後，「君が代」の軍楽があり，「大日本帝国万歳！」，「帝国海軍万歳」が三呼される(桃源社版pp. 125 f.)ことを，ほのめかしたかった？

## ｛補足｝越前の秘事法門・異安心に関する備忘録

13世紀末-14世紀

**如道**による大町専修寺の創建（1290s）；《←上記の“七高祖像”のように，如道は和田円善の弟子》

本願寺第3世**覚如**（と存覚）の越前下向（1311）；⇒如道らを帰依させる。

のち，覚如が上洛後，如道は秘事法門に走る（『反古裏書』）；←蓮如の孫・顕誓の書で疑わしい?

現在の説では，如道の著書『愚暗記返礼』は秘事法門ではないとされる（平松令三「解説」，『真宗史料集成』第4巻（専修寺・諸派），同朋舎出版，1984）；《←なお，先に参照した大原性実『秘事法門の研究』(顕真学苑，1933)は西本願寺の観点からの古い研究であるため，如道および『愚暗記返礼』を秘事と解釈している；同書pp.18f.では，如道とその一派の本願寺などに対する「反抗意志」を指摘＋立川流の邪義を取り込んだとする》

如道の子・如浄，その子・良全は浄土宗に傾き，秘事法門と見なされたとする（小泉義博『越前一向宗の研究』法藏館，1999；←如浄・良全らの秘事法門につき，比較的詳しい分析がある）。

15世紀

本願寺第8世**蓮如**が越前に下向（1471），吉崎御坊を建立。

いわゆる文明一揆（1474）が，本願寺と高田派との争いという側面のあることは，戦前からの一揆研究で指摘されてきた；↳ 谷下一夢『真宗史の諸研究』平楽寺書店，1941.

蓮如は，御文章（帖内・帖外）で越前や南加賀の秘事を攻撃していた。以下は，帖内御文の例より。

夫れ，越前の国に弘まるところの秘事法門といへることは，更に仏法にてはなし。あさましき外道の法なり。これを信ずる者は，永く無間地獄に沈むべき業にて，徒事（いたづらごと）なり。この秘事を，猶も執心して簡要と思ひて，人を諂（へつら）ひ賺（たら）さん者には，相構へて〈随逐すべからず。急ぎその秘事をいはん人の手を離れて，速く授くるところの秘事を，ありのまゝに懺悔して，人に語りあらはすべきものなり。（二帖第十四通「秘事法門」）

抑ゝ，此の頃，当国他国の間において，当流安心のおもむき，事外（ことのほか）相違して，皆人ごとに，「我はよく心得たり」と思ひて，更に法義に背くとほりをも，あながちに人に相尋て，真実の信心をとらんと思ふ人，すくなし。これ誠にあさましき執心なり。（中略）この故に，其の信心の相違したる詞にいはく，「夫れ阿弥陀如来は，既に十劫（じっこう）正覚の初より，我等が往生を定めたまへる事を，今に忘れず疑はざるが，即ち信心なり」とばかり心得て，弥陀に帰して信心決定せしめたる分なくば，報土往生すべからず。（三帖第八通「不廻向」）

蓮如の吉崎退去は，1475。

19世紀

三業惑乱については，上述の通り（寺社奉行裁定で18世紀後半巧存の三業帰命説を異安心とした）。

**長慶寺**に関して；「翌四年(文化)二月二十九日には，福井木田町長慶寺へ五〇〇人ほどの俗門徒が寄り集まり，「宗意安心之儀承度由」を申し張って寺内に乱入し乱暴狼藉を働いたので，藩は騒乱の拡大を危惧して，以後門徒の集会を厳しく禁止した。ただし，藩は，長慶寺と寮村勝縁寺が古義派に属する寺院であることは認知していても，暴徒による長慶寺乱入の誘因については十分な理解はなかったようである」(『福井県史』通史編3，オンライン版)

19世紀末-20世紀

**甘蔗普薫**（1910没）の著書，長慶寺の出版物など；『末代のひかり』（櫻楓会，1906）.

『問対寸抄』1-50（1890-97），『問対寸抄』続，1-7（1897-1899），『截舌雀余暇』1-10（1906-07），『大笑笑語』1-5（1909），『梅圃独語』1-4（1910）.

{補足2}「みのむし」騒動(パート7) と，パート18における電光朝露の御文を称える「おじさん」

{パート7における「みのむし」騒動の要点}

良平の兄・大吉が福井の中学校に通っていて，土日に歩いて帰ってくるという話から，福井との交通が話題にされるパート。

かんざしの件*の後. . . . ;《*おばばから聞いた話として,「水野いつちえん(越前)のかみさま」が倹約を命令しており, おばばたちは福井の御坊に参る時, かんざしを抜いて袂(たもと)に隠し, 倹約しているように見せた(pp.87f.)》

p. 90 ; 道がもっと狭かった昔，おじさんが福井の牢へ歩いて行かされたことがあった。

p. 91 ; おばばの話で，ごいつしん前は年貢がひどく取り立てられた。

その昔のある日,「みのむし」が金津の方からやって来た。「みのむし」は，隣り村の舟寄(ふなよせ)で，大庄屋の恩地さんの家で酒を振る舞われた。その後,「みのむし」はさんざんに酔って二本田に進んできたので，一家(いっけ)の市右衛門さんがおじさんが留守の時，あわてて村太鼓を打った(p. 92)。

町の「御家中」の一隊が鉄砲を持って「みのむし」を追い払うため舟寄境へ急いでいるのと，それがかち合った。役人は「みのむし」隊の1人を縛って，太鼓を打った家に預けると告げた(pp. 93f. )。おばばは縄を解いてやり，話を聞いていた。そこへまた，市右衛門さんが駆け込んできた(p. 94)。

市右衛門さんが太鼓を打った時，御家中の鉄砲方が通り過ぎたので，村太鼓を打ったことで儀間に行っていたおじさんが福井の牢に連れて行かれた，と云う(p. 95)。(さらに続くが，以下略)

p. 91で，良平の意識に沿った語りとして「牢の話の昔というのが，ごいつしん前のことかあとのことかおばばの話ではよく分からない」とエクスキューズされているものの，その直前に「ごいつしん前は，百姓はまことに辛い暮らしをした」とあり，維新前であるかのようなニュアンスである。さらに，その前のかんざしの話は水野越前守の時代なので天保年間(1831-45)であろうし，また丸岡藩で史実上の「蓑虫騒動」が起こったのは，安永8年(1779)のこと。

しかし，それはありえない。良平の祖父“おじさん”のモデルである中野治兵衛の生年について，中野自身が1840年と述べているので(「わが文学的自伝」,『中野重治全集』22，p. 6))，天保年間には生まれてさえいなかった。御家中(丸岡藩であろう)の鉄砲方が，捕まえた者を福井の牢に連れて行くというのも，藩政期には有り得ないだろう。

↳ この「みのむし」騒動のモデルは，複数の先行研究のある(上野利三『明治初期騒擾裁判の研究』Ⅰ，北樹出版, 1996，ほか)，明治6年(1873)に大野郡→今立郡→坂井郡の順で起こった，真宗門徒による護教の為の一揆であろう。中野も別の文章で,「明治の初めになつてからも，鳴鹿(なるか)川をはさんで一揆の農民と福井藩との衝突があつた。」(「思いつくままに」,『中野重治全集』13，p. 71)，と記していた。

それでは，何故この騒動を，江戸時代の出来事であるとミスリーディングを誘うような表現で記す必要があったのか。パート18で明治天皇崩御の後，“おじさん”が電光朝露の御文を称え終わった後，「御恩にはなつてるさかいの。何というたつて，ゴイツシンまでとはすつぱり変つたがい...」(p. 285)，と良平に告げることにリアリティを付与する為であった，とは考えられないだろうか。

↑史実上の中野治兵衛が，明治6年(彼の30代前半)に一揆に連座して福井の牢に入れられたかどうかは分からないが，もしパート7でそのような設定としてしまうと，上の箇所における“ゴイツシンまでとはすつぱり変つた”というおじさん(祖父)の感慨が生きてこないので。

↳ パート18は，日本共産党中央委員である中野が明治天皇を悼む祖父に全面的に共感する表現 ; ⇒(＋『海底軍艦』の君が代などを含め)自身の明治大帝に対する立ち位置を，隠喩的に**異安心**だと？